

おうじょうようしゅう しゃほん ちゅうかん  
往生要集 (写本 中巻)

種 別 重要文化財 書跡  
指定年月日 平成元年6月12日  
所 在 地 日末町（聖徳寺）

往生要集は、平安時代の天台宗僧侶・源信<sup>げんしん</sup>が著した仏教書で、極楽往生に関する様々な記述がまとめられている。上中下の3巻からなるが、いずれも原本は現存していない。

本件は、そのうちの中巻の写しで、長徳2年（996）に僧侶とみられる長胤（伝不詳）が書き写したものである。往生要集が書かれたのは寛和元年（985）であり、この写本はその11年後の、源信が生存中のもので、歴史的価値の高いものである。

半葉8行書き、一行14～16字で丁寧<sup>ていねい</sup>に書写されているが、現状5紙（10頁分）が欠落している。文中や帖末の余白には、注記や、脱文を補う書き入れがある。また本文全てに渡って、朱書きや墨書きでヲコト点や仮名を付している。鎌倉時代には、仮名往生要集が宋へ渡ったという事例を示す資料とも考えられる。

帖首中央には法隆寺聖霊院の朱方印が押され、もとは法隆寺に伝来していたとみられる。後に巻間に流れたものを、愛知県の山田文昭氏が入手し、昭和8年に聖徳寺に譲られた。現在の表紙は山田氏によって書かれたもので、また表紙裏には同氏による由緒書きが記されている。

